敎館寶訓附録

199
2

ト 2
199
2止

みちのはしがき

学文所

一　手習子どものおしへの手
を師範のおやは君父にひとしくて三恩を三尊と称せられたるなり　おやの
名をつけるも師のおやの業なり　苟且の業ならずんバつねによのつとし人の
さまと観るべきとし　まなぶものもそのみちをたてるに　ひとる時ハその業
を学ぶものゆゑ　其上に一時に四五人乃至七八人　師をとりて
みやうしとおもひをこらし　手習ハ書道字学あるをつとめ
一時によくてをしへ子をおしへるものなり　是をして
ハ何ぞも正しくをしへるべきを　後よりハ師も師のまゝなるを

二　そだてられたるを以て小学ハ字学と句読と同じきことを
とふまなびなり　女子も師に随ひて字学の内に於て句読を授く
也なり　弟子も亦よくうけとり便利なり　又その二ハ字師も
をのこはし　楷法国字を伝ふるものゝ女師もこれよくその師ハ

門 ト 留 2 號 199 巻 2
明治廿五年十一月廿七日 森鴻次郎氏寄贈

とゝ世の中に於て、目出度ところの悪風をうけて、なを二のこと
まなひぬる道しらつくもの世の中に在る人こそなけれきは道し、
父母兄弟人も此ところよくしかるべきことなるべし、

二 サテ、よの中に於てもよく齊家あるものぞ齊家を格物あるをも
大学篇にそ親民といへり、親民ハ齊家畢中の緊要なり、禄も此路
のこ、父母妻子の養ハ收ぬ禄ハ禄にあらず業なるものこそ家民の格
育ならぬ業ハ業にあらざるなりさてそのことをしる一つのおやたる人こそ、
他の子供、あまたあづかりて、仁の義をおしへなどすることあれば、
格物のことをも暇さらば道、まなびて教訓のことぞそのなけの傳
禄なりあるべきことをしるべし、これ万人のこゝろよくするの仁なり、君と相
ならぶ一国の父母なり、父母なればこれを知らしむべし、

三 サテ、年を重ねて初めてなるべき人こそハ、よくしるべきとなるは四書などおもむきを
人情に於て書面のとほりなれどもなほ年とりて家に居る人こそなほ
なほ文をよく近く史書などあるは漢書などとてもなるとをのきまなことを
心得べし、

四 サテ大学ハおやのまなびを王位をもたつを草履をぬぐごとしと
地居にも人の恩愛のこゝろハなあつきものなり恩愛の好むがあまりにの
つまりがたきハ賢愚上下とありといへども一致ならんとはあるかなり
在る小家の身分ハ宰文治学に家を破るの類などを防ぐ、儀礼の元
祖の家風を書物と間暇と財用との三つにきゝ人このでくるなるなるをとを
此一義論じつくすの仁をよくわきまへあまた万人なるかり倣くなさるや
つきしるべきなるものや、

五 サテ年しる春齋増益なる天命ありなれそれを子とせる人の一子も
ちからあるとおもひてなほしまして遠くへし、子を埋めんとするなどの郭巨

もてなしのぶとそ子にはあまたのめ人まじく字様くなりてはゞかる事
おてきあめありかれこゝろをもて別に字義をなく〳〵とをのばぬかくおく
進みてよむべき人のおもさて〳〵粋嚢にわれおほえとおかし
されどこれを新人性の上へうつるありて子とよしでかし
それのぶ人の子もしらずに寄りてしききはあくこゝろなりのえそのうへ
まなびとおきてしほにえらばしうゑめでくきまかじを儒童子に捨
さむるもおこりおほきもののとなり市中へ宅をうりてありとも字まなぶ
とてんをかまうなるもとにるゝ財入るを見つはあたくなりは
わとし邸外の門人の僻拙をも傲居の費を助けて人もありくなり
邸外の束脩は入学の時に式ある字五節句に式ある字又は三ヶ字助
毎日に式ある字つての謝なり独人君まとれかのぶ字義を
そもそもおかけるをあつめてあらぬめかしよの中へなるあらん

いさゝかまを拙出せる人誹謗あるこそもののありて賢人に質者は誹謗にふ
柳かはゞしまのびたる文の華をとくにふせて千金の文字をうりたるそれに
吝嗇のこゝろにむさぼりうつるきをあかりなりいのちよりも財宝を
うとむもあのぶたなきものまなび子供者のなき人の宅と仁慈
のさま君朋友のまなびとをしてあきんのあるをあらはすにろく
とものなるはつゞくしるいふぞ

㊅ サテ邸外の風まで束脩よりて学を体するに全く束脩のつゐのそ
あるものとあるべし文仁義のもちとおきて教育の財をうけ天地交
易の卦にのべたる人もあまたくゞ教喜なるなりは終りに正しくなり
いづれの人もつ叶はぬものは教えたりけり君子は民の父母
よりくおもしろきぞ

㊆ サテ大人の家法の中ニ二人ある封値をどなきにもろかきまた〳〵そゞの

乙酉納學話

[印]

うへは字の音義をだにさとす道の間あらハせんほどにてよし、有斎の學附ハ方
なり、二人ともそろひてのよききは、天道のおのづからなるところなり、
(八) サテ、コトバヾのまなびのなる、毎日しだ句読のことよしおそき益あり、
よくしるまけハ、傳説をききてべきてあり、さけとききてふかくび
とをなきあり、寺禅、禅寺の僧侶年ふるき人の字の音はやく進
むとしこそ此ことをさとれり、あらまより傳釈をききてあとまで
素よりことなる人ぐらいて、さけをとるを先とするものなし、玉の緒
琴かてもそくもま、まなびのなきとのむよりハ、おこなふを先とせ、
心ども人々なき小学の道あり、十二三才以後ハその身さけのまちへ
あまおこなハざらんめや、おこなハざらんめや、

としへのまどいる抄 畢

時習話

論語とハ、昔ならいふ道の、みちのもとしとるとジヤ、此書廿篇、こゝ合のみちの咄ゆへ、論語と名付さるじや、巻之一 等ハ各もつこと通じや、

子曰云云 此こゝろハ、聖人ぬ位らせるる、大名ハ大名のみちをまなび、半人ハ半人のみちをまなびて、其時を失はぬぞ、ふとおこなひつまにならぬハナントト面白きことをジヤナイカイと仰られしるのぞや、サテ學時習説の四字ぞし重きをヨ学と仰られるハ、みちを学問するをじや、花学文のをでふるいぞ、そこ謂て学するなれバ後悔するあるべし、十カく說ばしきこそぞふるいぞよ、聖人これらをまなびされて、よきみちにみちひるゝ、あせがるき此のは一言ハ論語廿篇のあるあじや、なのよく承り其ほよ、つぎなる時習と仰せられる事、至て大節じや、十歳前後よりもろち前後まぞふ、よろしきの学文をなすべき時じや、此时を失ひなしして、つまにあやかろうぶうを、時習とはなぞや、ましからふあせとうかしくらして、此时を失ひぬらんてりるだ、田畠のあのうくそろけおそな

まかこやしのうけ時ハこやしをかねがちなくじや米にても麦にても又ハ菜大根
なにゝよらず其時を失ひてこやしかけずさくもきらしぜハそのかなるところ
花もさくまい実のりけもなくて子供衆若き衆学ぶべき時にならはるゝし
毎日しつ其ハ習ふが一生涯のもとじや月日の立ハ矢よりもはやし此義を
能古ハ此習ちしめるよふにかあうてあるのにをりおさなき子ナツタリ油断ハならぬ
ぬぞサレバ各ゝこれ聖人孔子の御をしえをきいても守て後悔致さるゝな
サテ文字とのこれ学文の躰有事ハ幾度も云ひ聞せてこゝちをそらさぬ
しせハ五人のこゝろも直るしおさなきこゝろがみなそおさまれば百万石もやすし
おさまるそのもとなるを葉も枝も迷ひされずこゝちハあざみ春雨のよ
た柚じやあれどそれをさまを天より承れバ木の下れ草までうるほひ
て各それの草木まで花咲て見事なる桜桃をお前さんてひろき
都も学の錦となるがごとくめでたきことじや国の君もあいその心の
御政のこゝろを学でおさめるを以て不亦説乎と仰られしもじやおもてよしあるべ
き御学文じやサテこれ学文するこれ春雨を頼ひちるが師ありて
天道に叶ふやこゝちのあめふりて冬枯となるもぜひなき事
なれど各〃もたへてまなんでみちのうへをたゞしおろかきここやと
いふべき大節の時を失ひてはあなたもむなしく月日を送ります
これよりこゝろをなほせサレバこれハ一ツ義を見て勇をなさひおもひ切べきことじや
此ごく読書してガチガチとしてあてもなき各〃方なし学問の時を失ふなるまじきぞ
こゝろざしの丹誠にて書物屋をたのみもとめ去秋拾翁の
このたびかりいれしる金子をもたし是れ故商募の請拂もあつ
かれて孔子の仰らるゝもまよの道を失ハぬぞ今年を暮して
学文不とふ名ざりなる書おハなし是れをくるしめ
ますまじきもおのれ二やハさらに悔しくとろけとるし
なきぬ事しなれどいづれも自由自在に学んで時を失ハずに

つまる所ハ学問ハなくてハならぬものぢや。年月の立ハ矢よりもはやし
子供衆の若衆となり若衆も老人となるはたちまちの中じや
サレバこそ聖人のみちのたまふ「…」ときかず此ことば切なれぞ
いづれも学問いたして、まことのみち成就いたすやうに
らしきことのれよ。万一年とりたる人このところまでもこのまゝで
ござるならバ今よりこゝろいれ、ひとはからひて、月々人の方にも用ゆ
いふすこし気をつけやうやくしみちの味ふちの用もおもしろく
よくよくしあれよろづの事にこゝろをとゞめしてもみちの外の
一切むだなる事をせぬやうにして一筋に学文をまなぶべし
むだなるむだごとし。一切世間の人（むだ事をおもはぬ）ひとりもさとるまじきやうなる
ぶつし経書をよみ和漢の歴史をよむも皆みちのたがひ詩を作
り文をかき書をまなぶもみちのためなり。学問ハ貴賤貧富老若男
女にかぎらずみちの…ハ世の所の…みち…ハ…あまた
ちまうけてつまりかなへるを修むる事世の所の…
うよはきみちなれバいづれも修れはく明らかさく見れバよくわかるべし
あしくくさるものぢや。サレバ学ぶと修るとハ大学の明徳を明らか
ときまろぶのぢや。これも身にこゝろの明徳を照らバおのづからみちの要は
そのまゝのの玉へ止まるのが習ひじや行ひじや（二男三男をかぶのゐきよりの代）ひろしのことしくハ
けしてむかぬものだや。それよくよく…みて何か一藝を達
身を立て家をおさめて父母兄弟の一日も早く安心しさせよふにせう
ショこれ孔子学の一大事のことぢや。孔子の仁義の道よくよくまなびてみちを
わきまへ親ハ親しく治り家内しかさまれめでたきみちなれ
ば身ハ安楽にかさなるなり。されバ学友お集めておもひ…をを
ほどあゆ恩を知り敬て無益の金銭つかはずして五十るの…
くゆまを心得学文にかくのごとく従ひサレバ聞く人のこのおハなさう
の事同輩目下にも事へて同の者よりもかげをつくし
あまつさへ孟子の仰ちらるゝ天の事くと孔子の詩をと道

ならびられよ明德をもつて弟をかさね至善を以て家をおさめられよ人と云
てハ礼を業とハ鳥の両翼のごとし車の両輪の如く一ツとうしなふべからざるものなり此外に多
年読きかす言どもあらん志まずしていかゞ学びてかひあらんハレヨ 按
（○よみきかす先生の言ハ学文に心ざし出ざれバ其ときにも書物ぐらゐにてうつらうつらとして学文の事を手習のいとまにハわすれてしまふ）
子供衆のみちおしへ
ハ夜のあくるより ねるまでよくよくきゝて精を出し
（学文所にて在るうちハ静かにしてゐるといふ事を忘るまじい）
てそれらをちゃうしまひ講釈をならひ侍をつくることをならはれよ
むだぐちをきかず其ひまには書物をさらへハレヨ 見るくちをきくまい人
（○休みの日も火事のまねごとや喧嘩ごと悪口などをいふ事ハせぬもの）
とばかりはなすまい 武芸の先生ハ子供などを先生はいれよくいせつな役
サレヨ 年のゆかぬ子どもはいでをあれこれとつまらぬやうなしちさき者
子ハ年まちのきちくさきでつかりしやさしいにされヨ他所の人と
あらそひすまい 町の子どもとあそぶまい 月しさの子と馬鹿にするまい つら
なき 狗猫をいびるまい 無益の殺生をするまい ちりも見ぬ犬をけ
しかけていひのうきぬの花をとるまい ちょうけのおもとをとるてい
よその栗柿をひろいまい 井戸のきわへよるまい くされ
竹の子のあるところへ入るまい 筆とすみのハ大事とたしなみ 大食
たつくひをするまいしかけが有まいすき見をすまい ぎく
をするまいこはき所に立寄るまい あぶなき事をするまい つまでとな
りまい 稽古のひまあればるすまい 町へ出てあそびまいあそばれ
するまい あそびすまい 供しさきながしてそれまてケンクハ
するまい 人をくりまいしてオウチヤクするまい ひとの悪口をいふまいこゝろ
立すな子供衆ハ別てしまってちいさき者のみハかしこくのことをたしなむ
らぬもの 随サレヨ 人をそしるまい 友達ハよき
みちのみちづれなれバこれよりきをハ御あひてしまひに弟のことあつかふべき
をたしなめあけれバよき事を勧めあしきことをなをすことを知るべし
のゝしりあれい 凡て人のこえがりとせば無益の気をとせず 万事
天命の分限を守りてくらせバ此にくるまいる一大事なり
学文のハじまりはつまらぬ我をはなてはまことのみちと云

丙戌發學前教

あるべし　さなくてハなくてもよし　友達ハよろしきあふさめのおとなふ
をとなふべし　孟子もみちを責るハ朋友のみちじやと仰せられてござる　〇但しみちとは不知りしさむる時ハ和合せぬされバいはいみちの学問の大事なることと云られたり　俗学者の
執る事のみちハ次第にゆるみていろのみちまでそこなふなり　みちをまもるなり
又ハ高名のよすがの又ゑ身上つぶしころし　一つとしてよきことなし
もし誤て小人の学をするならバ不亦苦乎ともいふべき也　孔子の御学文ハ七十にハ
大なることにあらず　明なるみちにおもむき給ふほど心廣体胖にて
ありて身もおさまり家もおさまり　子孫息災にて此世益ある事なりても
あれどよきみちハ太学問じや　さもなくれバ聖人何の益ある人にはあらず
あはれバ心をおさむべきや　あまたの人をして大安楽せしめ
みちびきあふあり　かゝる天地同体のありがたきのところだと仰ぎたてまつる
其は席につらなる面々　花学文と實の学文とを　苦楽二道の界とする、
心をつけて必ずふみまよふまじきことよのみちを学んで時を失ハぬ手段
なりつねにおもひ君子にならるべきことじや

新玉の春も始の学文所開き各々まゐらるる去年は
心をこらし清めて当年よりは別してなほ新に
行ひの学文もよそのきも学文もあぐるよする段せし是
今日中庸を説るるも世の中にて天命をしる事は
一大事なることに学文をするにて天命をしることを
第一に学文をする者は常にくちにいひ謹まうしき
新よしてこころねにて天命じや経文に天命是を
性といふとも佐ラレテ天命をさへあらへばおのづからひとし
己が本心はしるなり本心さへもちまればにそ学文はやすいと

おさまるものじや。聖人ハ生ながらにして此本心を
失ひたまハず。此故に生れながらにしてみち志玉ふ
ゆゑに。志るといふも。をしへるといふもいらぬなりかのごとき
賢人にましまして。小人ハ多ハ天命をしらぬ腹に
生るゝが故に本心をしらず。国所ハ国法をまもるの職
分としてなんなく。家職ハ家をまもるといふ職分の本
心なし。学者ハ人をまもると云役の本心なく。儒者ハ
世を済ふの業といふ本心なく。此外の道の人にも多ハ
天命之本心をしらずして一生をあだに送る

ことあさましけれ。サレバ天命を知ることハ学者の一大
事なるがゆへに論語此開きまれハ。おのしへ天命を
おしへたまふところの中庸をときたまふなり。三ッ
子の玉三井百までといへバ。子供達も立る人にも旅
ころうれば。サレ今日木綿なりとも着して。サイ
ハおしとも米の飯をくひて居るとも其上にも
重桜薪の屋根なりとも雨のもらぬ家に住して
何不足あるべき。しかるに其のうへにまだいの気随を
求め其余りハましたくおもひ世の中に百文の七倍

八合ある米さへ三度の飯もくひ兼る人さへもあるに
三度の飯を腹一ぱいくふ上に酒をのミ肴をくひ色
道の遊興散財のむだ喰にあたら月日を送り
父母の礼も家業職分をも忘れて居るし アヽモツタヘ
其のうへくひの毒物が子供の胎毒となりて疱瘡
麻疹(はしか)も甚重し 己が身も悪くなるを傍言を
やうまてハ中年をまたず死ぬるコレ皆天命と思ふ
ぬのあやまりじや 世あれど家業勤め此不足をさし
つゝしめる人もあるにいろ〳〵の物ずき服具などあつめ

親類朋友の困窮をすくふても志しなる本心を
忘れさるなかれ 右迄しるし此類は数多にして筆紙に
のべ尽し難し 推てしるべし サテ当学文所
ホトンド頽廃すも庶民の中には門人一統の赤
心を以て通じ 信仰の中には邪も帰するもてき
旧冬二十五日三人御扶持頂戴しておそれ真
加至極ありがたき事也 依ては文学年
より騒動学文不開中とおそれ候儀取計
是は此度の三人は扶持をもって我等衣服までに届き

萬〻つとも毎月の雑用あり重ニ申し一ヶ仕来
指南之読書手本之服難有仕合ニ存候指南
の為ニ而当分の身ニつき衣服ハ入用申し只ハ学
文所書籍持ニ甚多指南へ一つとも是も返し
師弟一同大赤心を以て報じ候毎年ニ千金
位の書籍持ニ而拝見ニ申候当文学文のて
ニ貴物買物とハちがひし毎月の月掛諸毎
年の事孔ハ学文所へ参もの有無ニつき候志
ニ至人孔子への事孔ニ指セし而相学ニ候書指の

人ニハ是ニあつく事孔ニ仰上べきの道を学ぶ学文
所ニ在べバ一同当年よりハ一きつと丹誠を存され
候ハバ書物も随分買入し候事前年中ニ「我等よ
少きの先生へ読ちきの事ニあまり何れも存じ居
米ニ先生の事学文所へ不及も一つとも申さる益
第ニ而事孔指上げ申候ニ四年已前ニ逝去いたし
後も三年の間ハ事孔存生ニ有之の例す
是迄ニキツト事孔指上げ候ニ今後も出きき苦しくも
跡ニ残物ありども其儘先生の住宅へ先々のまま

御霊前に備へ子供の時の先生ハ遠方ニ居る人ニ有
万事行届き為くつたへ幸便あらん時ハ我く極困
窮の中よりも少しの金子等指上ハ文字の先生ニも
みちをおしへ給ふ先生こなる人くだ力及ばじものゝ
先生御ふくみなりなきやうに文見れしまゝとは御孔子
申上道には皆これ天命を君ぬ出るもの道なりしか
まずまことをつくしふやしはゝ天命しるらく成学
文ハおのれ業ハ必ず此ことわりを深くのきこゝろべくは
よの中に跡を見りを辨へおしていろゝ先生も
うとし教ゆる学問の御孔夫子や時々の御師撰極も
ふ同みちを御同じくも同輩のよふに立こへ也
主従道行の大名禮のふるまい十七ト天命ある志
うまずまやまちの大学文もよく心きの小学文も
又におまねのこゝろハ天の罰として身のきずハおそろしき
教ゆる上下畏て慎みて天命をおそろしかる様によく
かきの先生さへも生涯唯一人ときはむべしましてや
みちの先生や師匠をふやしてはおやをふやしたる也
多くなりてハ十力くみちをとるちに能事しまわろきハ

おしまぬやうにそれ故に御恩ある人を指して先生と
仰ぎ奉るべきことじや。忠臣は君を忘れじ、学者は師
を撰ぶより師匠なきは、習ひまて学ぶがよきなり。
我等文字の先生へ事する道、先生仰せにあず
かる時は、諸芸あるよりへは行ぬる事の時さして
御用なりとも、何事をさしおいても急ぎ申
上て、先生の御用成されし事を速にさとすよう心がけ
さて此外、総てこれに准じて先生をうやまひて大
事にせねばならぬ。一つ筆の道につくされたる恩は一天

命をおそれつゝしむる事とおなじ事、是をもて
よくよく学べ。学文所の大先生とはなんとなれば
あるじと云ふなりて、天地の御恩と申也。又天命の理
を面白き事もあるやうに不守不楽して何程
努力までよくつとめても、天命に叶ひは
ねば学文は出来ぬ事なれば、格言よし。此天命を
しらねば、いきたる死人の御学文は知心なきもの
なれば、急ぎてしれ、心ねをあらためても学文の道
法を守りて、聖人の立てたる道を守り達する

なく只ひまの中に詩文章をならひしのちに
そましきなりても猶りそよきかきの出来る様
に致せしよ芸道のたなし甚さあそびをやめ申て
毎日一礼にうりてこゝろのれよきまてさへひまがなる
なて八おも来ねなり何もしなくもすきになるべし
書物をさらふともかきたる本をやぶる事気海丹田よ
生まれしと身にしきてよりもれよ永孝なりも又其外
に接待一方にもなく仕事にもならぬものにも
両親その時は先君兄弟年礼などにも
るやめて学文和にすゝみきそにてもをしめしと
おのれなり今にてもさよふなしられども家内ある
身ハさようにはあらん八一僕も無ふそのお来ぬ者も
時分上用のかけたしにまありても気をつけに思ふ
ともおもわねばならじやうじ正事八なるうけ転ずる
世間の用向きにとりてなるよしひまのをあられ故
様なくきなり此家の悦ぶにも何も節にかなり
さるてハなるし唯これよりたをしつづきのも
来るなりても学文の上にも生きなし各方の志あれ

ば精出サレ曰詩文よろしきの学文ハ第一に無益が
沢山なる故に名方無益の金銀をつかひ出して
書物を買ハれよ学文計りの為ニ計りをあて
ましててんでんに書物なくてハ詩文など無益なれども
のなれや其ハ稽古の時の掟ハ一切世間のウワサ出し
禁制ぞのを云ひのちなし あそびのちなし 殺生
のちなし 碁すごろくハ名けいこをみなつゝハ真に
云て代りあそびをして ケロリトせしあそびであるを
光陰をむなしく暮すべからず 天命ハ恥なし
礼を以て体とす 即ち中庸之庸ハ礼なれバ礼儀正しく
かるべし 我昔も亦指南の間にハをしゆるにも
見るでもにも事しもあれバ九ツより暮までハをしゆる
事しを体也べし 唯安井生ごとき人ハ昔しよりの
門人の様なる遠方なるを以て書役をしゆることなり
手前遠方の門人ハきび敷をしゆることの 当学の弟子
もまた断なきをしゆるにもまはふ事もあい
まじ又おのれよりにしてすべきまでのみちび
又毎朝の素読毎夜の講釈これまでの人数まであま

まじし「サレバ此書ハ他にまさりの四人ハなかまでも厳密
断なるの「まことのうちハ学文をこゝろの程をしるの
ゑきてをおそるゝなり「みち一片此学問なれバ
元日より大三十日まで休むと云ことハなし畢竟
文字の学問なれバこそ節あり綱ありて此の道也。
よろいの芸学ゆへなれさればお互に忘ぬように
致すべきことじや「去暮諧操文法作もいかゞ今日まで
ひらきハ一新目も発明なれど是一周忌しく
操学イタサレヨ無点の本を各独りまてよみて最る者
にるれど明の豊坊が石経大学又中庸も大学も子思の
作と云芸文志ニ中庸二十二篇と云孔叢子ニ中庸四
十九篇と云数の口材なる事ハいろいね事しるれどそれら
までもとづかろ志なしなるまで「サレバひまあるのゝせにあるく
書籍よまずしつくるくして文字ニて学問するものハ
いろいろまじる云点のたが独り読ものをよむまゝなるべきを
じや「其のさめるも詩文をまなぶ風しよくもあし
ことおりふてる代をつさといひまよふにならのく詩文の
学お手さるもの「それらハ毎日一詩毎月一文ツヽ

かきなほし居し「凡そなにごとにても其事
にても毎日幾篇づゝ幾冊づゝ読むと一まづ
定めを立つべし我が詩を作りよるハ文をかき
書物ハ本をよくなしたる後ハ手習をなすとも日数を定め
を立居し其間には古人の詩文など諷詠して文章
のためにすべし其のさだめをせぬうちハ何も無益な
ときハめぐる三百六十日あるを抛ちてつゞくべ
し遊山花見にも出でずして夜も机の上に眠まで
目さめるまでだゞちに燈ぬきかきをまするやき入し

をあてるといふ身になるなりきりてその後に毎年の
暮に筆墨ものまで文ケの本ハ四五部かならも十部かならも
買入まうくまうのぶべし我ハ十五六歳より二十位
とれ君の通にまなびして習行しうろうまちまれる
さへなりしも来るものにハあらばまじく夜根
なりぬ境界にてハよろしけれど心を付ざれば詩文読書の
花学文も出来ぬものなれば湮鬱イタサル「博徳行の
この学問ハ文一冊も入らぬ庶子四書一部 あましだ
あまりなれども「近ごろこの事にをしへつゞき名をそむきは

まなびのたれよくぞ教館の法をばそむかぬやうにおほやけの
ならびにみちとよのなかきしとの二つをたゞつゝましくあるべしや
何れも一同勤学致サレ且

文政九年丙戌納學教訓

光陰如矢當年も月ざきのまよおさあまなり
論語よ學で時よ習ふと云 佐ぎて素讀を
素讀の時を失ハずなかるし おさめて
大人よなりて素讀をせぬよふりよこの也
何様ふ 又若き人ハ講釋ハ時を 主失ハ
ざし習し 納めて後よ出さくの後とも
素讀を下ハ尽五（講釋を習ハ尽五 別本）時をとを失ふべきをすべこの
らべ 芋冬菜もまきおくれおまぬヅヨ

おそるべし〳〵つゝしむべし」油断ハ大敵ジャ」度々
説聞かせるといへども何事も唯一ッせよ
二ハ出来ぬモジャ我等を遊ごろは当店ハ家業一座
の人ニ任せ置そ宅へ来る人の脈もとらぬ
気立も附ゝ純一ニなれざるなるほどにより才
子達も万ゝりと抛て純一ニなりにるは
學と醫者ハ其事を二ッニせず公用武用
等ありし忙き時やサッパリと引抜て文学
文純一ニ却て暇を待可為などぞ又其勤の
常なる者ハ日勤を聞しとも二ヶ月三
月と学文所へ踏遠ざかる事なし」
サレバ常輪の勤モ無精なる事ハ分ケニ
ならず是亦辨ふべし」菊年ハ我等痰症ニ
て春より冬までも煩ひつゞけ少々毎
出勤三人御扶持ふ加増のいきほひニ
て扶角無滞御納る事難有

るゆへは、サテ、学文處ニおいて、紀律を厳重に
なさしめて、徳行一所然る大学文も行ハしむべき
也年可なしやとも存ずるに、万事厳重なる
がよし、上下の仁礼道ことに一同、ゆるやかに
三級ほどにても勤は、讀書、今日目出
度殊に、尋常目出度開きは、眉ハ
学文不もメ切らず、当くも、完まて
おこなひの大学文ハ、もとよりの儀、よく
かきの小學文も、懈怠なく継ぎ
せらるべくは、少年童子とても、学んで
習ふの時ぞ、ゆめゆめ、失ハぬ様に
ならぬ事

文政九年丙戌、十二月十五日、

敬館斎夫（花押）